



中学・高校・大学のそれぞれで日米双方の教育を受け、国際ジャーナリスト・ミュージシャンとして活躍するモーリー・ロバートソン氏。基調講演では、氏が実際に経験した教育の日米比較や豊富な取材経験を交えながら、今後の国際社会で生きる能力や価値と、それを育成する教育に必要な要素について提言いただきました。



モーリー・ロバートソン 氏

ミュージシャン、DJ、ラジオパーソナリティ、ジャーナリスト。日米双方の教育を受け、1981年東京大学・ハーバード大学ほかにも同時合格。3カ月で東大を退学し、1988年ハーバード大学卒業（電子音楽・アニメーション専攻）。複数のラジオ・テレビ番組にも出演。



身振り手振りを交えながらの関連自在な講演に多くの来場者が聴き入った



「あまりにも過酷な知的ブートキャンプ」のような討論の授業など、ハーバード大学での経験も披露された

岐路に立つ日本社会。AI（人工知能）・グローバル化で、生き残りと繁栄に必要な4要素

「いま日本は“critical junction”すなわち臨界点を迎えている」。モーリー・ロバートソン氏は、講演の冒頭でまずこのように投げかけました—うまくいけば、一つの才能が次の才能を次々に呼び覚ます連鎖反応が起き、21世紀ルネサンスとも言うべき文化が開花する。しかし下手をすれば、失うことを恐れ挑戦をしない責任回避の姿勢が蔓延した「窒息ニッポン」となり、グローバリズムに淘汰される—いまがその分岐点だということです。「AIの普及やグローバリズムの下では、人の能力が画一化・規格化され、数値で測定可能になる」と現状を把握する氏は、新たなグローバリズムの世界において日本の生き残りと繁栄に必要な要素は「互換不能性＝翻訳不能性」「non-linear」「即興性」「context」の4点であり、それを踏まえた教育が必要と提言しました。

創造にはジャンプや破壊が必要。他を以て代えがたい能力や個性をいかに育成するか

第1点の「互換不能性」について氏は、「これまで日本は互換可能な能力・人ばかりを育てていた」と指摘します。例えばアメリカの中学では“なぜ地球は平らではないのか？”を討論する理科の授業を経験し、日本では地球の値を基に月の重力加速度を計算するといった授業を経験した氏は「日本でしていたのは、暗記して応用問題を解くlinear（直線的）な勉強」と振り返りました。しかしこうした能力を担保に日本が誇ってきた「技術」や「品質」は、今後はAI、あるいは中国・インドの人材に凌駕されるでしょう。そこで必要なのが第2点の「non-linear」な教育、“Why?”によってひらめきを生む教育だと氏は述べます。「既存のルールを変えるほど強烈な個性・能力を持った人が出てきたとき、それをどう排除せず育てるか。ひらめきを許容する社会になれば、日本のジョブズやウオズニャックが出てくる」と期待を述べました。また第3点の「即興性」については「generate（生成）」とも言い換え、自身が東京大学で「物事がgenerateしていなかった」ことに感じた物足りなさに触れた上で「日本社会は傷口を塞ぐこと、マイナスをゼロに戻すことは上手。しかし、例えば筋肉はトレーニングで細胞が傷つき、その修復の過程で以前より太くなるように、破壊からプラスを生成する視点が日本の教育に欠けているのでは」と指摘しました。

世界に誇れるコンテンツは目の前にある。その発見には「ひらめき」が必要

第4点の「context（文脈）」については、「前後関係、あるいは前景（いま起きていること）と背景（なぜいま起きているのか）の関係は、現在のAIやビッグデータでは扱えない」と説明。そこにクリエイティビティを持つモデレータの存在意義があると述べ、「日本では“行間を読む”という言葉で、文脈を捉える能力を評価してきた」と指摘しました。さらに氏は、原子炉で世界シェアを取る「手技（てわざ）」や、抽象形の中に深い含意を感じる「崩しの美学」、さらにはすぐに「略語」を作る習慣や「痛勤」と揶揄される満員電車までもが「互換・翻訳不可能な素晴らしいコンテンツ」と説明。茶道家元の点てた抹茶を味わったときの衝撃的な感覚と「一期一会」の精神を例に「いまという瞬間にengage（関与）することで、ひらめきとは天才だけのものではなく、手を伸ばせばそこにあるものだと分かる」と述べ、既存のものの中に新たな価値を発見するひらめき＝クリエイティビティが、日本の未来の可能性を拓くとして講演を結びました。

アドビ システムズ 株式会社

〒141-0032 東京都品川区大崎 1-11-2

ゲートシティ大崎イーストタワー

www.adobe.com/jp/

Adobe Systems Incorporated

345 Park Avenue, San Jose, CA 95110-2704 USA

www.adobe.com

その他のEducation Forumレポートはこちら

www.adobe-education.com/jp/aef2018/report

Adobe Creative Cloud教育機関向けについて詳しくは

